

春

鶯

囀

うぐひすのこゑは、いまでは、ホーホケキョーときまつてゐる。このやうにききなしてきた伝統も、また、ながいこととおもはれる。このなきごゑを法華經にひつかける技法は、江戸時代の俳諧にしきりとみえるところである。まづ、ずつと降つたところから一例を出すと、

今の世も鳥はほけ経鳴にけり(一茶「おらが春」)

さかのぼつては「毛吹草」の第一巻に種々の作例を示してゐるなかに、つぎのやうなものがみえる。

法華經ぞ鶯はよき声で候

鶯の声にや誰もほれけ経

「山之井」春部、鶯の条には「法華經となくといへば。経よむといひて。初音は序品。あまたになくは。千部などいへり。」といふことなどもしるしてゐる。ついでながら、ここに「経よむといひて」とあるは、「経よみどり」の異名をふまへての表現であるかもしれない。また、これら俳諧の作法をしるした書物は「うぐひす」と「法華經」とが付合であることををしへてゐる。それに対する実例を挙げるならば「世話尽」巻五に

金衣(こがねごろも)に包(つつ)む法華經

龜

井

孝

毛をかふる鶯ははや音を留て

ただし、いま、ここに主としてとりあげようとするのは、ホーホケキョーの方ではなく、ほかのかたちの写声についてである。さて、こんにち、鳥のさへつりを写すかたちは、ピーチクである。これは、日本人ならみんなことものときにおほえてしまつて、だから、おとなこともの区別なくだれもが知つてゐるし、みのふかいかたちである。そこで、ころみに、三四のひとに、ピーチクとなくのは、鳥のうちで、なんの鳥だらうかとたづねてみたが、これにはたれもはつきりとこたへてくれない。こたへにかへるに、むしろ当惑のいろをもつてしたひともあつた。これは、じつは、問ひそのものがかならずしもよろしくないからなのである。もともと、ピーチクは、これといつて特定の一種類の鳥のなきごゑに限定されたかたちではないのである。われわれの外界に対する反応のしかたは、ある意味ではかなりざつて、鳥のさへつりはピーチクであるときめてかかつてしまつてゐるのである。さへつりかたのうちに区別をまつたく認めてゐないわけではないが、しかし、ピーチクは、いはば鳥語一般の、昔流にいへば(南蛮)げきせつ、その印象をうつしだしたものとひうる。な

は、てぢかの辞書にすこしあたつてみたところでは、あまり身ぢかなことばであるせるか、あるいはことばとしての資格をみとめられなかつたものか、とにかくピーチクの項目をみいだしえなかつた。ピーチクから、ひとそれぞれに、やまがらなり、ほほじろなり、あるいは、ひばりなりを連想するのは自由であるが、このことは、やまがらなり、ほほじろなり、あるいはひばりなりのなきごゑの個性をうつすかたちだが、そのままだちにピーチクといふことばであることにはならない。カーカーがからすにかぎられ、ピーヒョロがとんびにかぎられるというやうなふくみでの意味の限定は、ピーチクにはないのである。そして、からすのごゑはピーチクでなく、また、とんびのごゑはピーチクでなくとも、ピーチクは、依然、とりのごゑなのである。うへに、こんにち、とりのさへづりをうつすかたちは、ピーチクである、とのみ書いて、なんのとりのもいはなかつたのは、以上のやうな次第ゆゑである。ピーチクは、その点では、カーカーやピーヒョロよりも、もつと抽象された段階のとりのなきごゑなのである。ただし、うへに「とりのさへづりをうつすかたち」といつておいたやうに、他面、ピーチクは、さへづるとりのさへづりかたをもつともありふれたかたちであらはずことばなのである。からすのなくのを、また、とんびのなくのを、日本語の慣用として、さへづるといへない。おなじくなきはしても、そのなかにはさへづらないとりとさへづるとりがあるのである。いひかへれば、ことばのうへで、日本人は、とりにさういふ分類を暗にほどこしてきてゐるのである。ピーチクとなくのはなんのとりにかかると問ひを發してみて

も、これは、意味をもたないものともいひうるわけである。

ピーチクは、要するに、ことばなのである。すなはち、ピーチクは、たしかに、ことばとしては模倣的なものではあるにちがひないけれども、しかし、それは、われわれ自身が直接に外界の印象に忠実に反応するかたちでなにかの鳥のなきごゑを再現してゐるものではない。さうではなくて、それは、そのやうなかたちで、すでに因襲的にあたへられてゐるものなのである。別なみかたをすれば、ピーチクといふことばによつて参照される外界がある特殊の個々のばあひにあたつてどういふ鳥のなきごゑに対応するかは、文脈または場面によつてしか決定されないのである。ただ、その適用の範囲に制限のあることは、上述のやうに、われわれの日常の経験が知つてゐるところである。しかしながら、さういふ適用のしかたにおいて、ピーチクに変遷はなかつたであらうか、つまり、ピーチクのやうな語にも語としての用法の変遷はあつたのではなからうか、これが、まづ、わたくしのささやかな疑問である。

狂言に「鶯」といふのがある。そこにつきぎのやうなくだりがある。

○やあ。是に鶯が有(る)。扱もくよい鳥哉。あれは世間に重宝する。三光とやらいふ鳥であらふ。なんでもさいてくれ

ふ。(続狂言記、卷一、五)

問題は、この「三光とやらいふ鳥」といふところにあるのであるが、これを説明する資料として、つぎに、貞室の「独吟千句」を

めぐる論戦の書としてその方で有名な、かの貞恕の「蠅打」のなかにみえることばを引く。

○俗語には日月星となく鶯を三光を鳴と云也

みぎの趣旨は、うぐひすのことを三光を鳴くといふのは、俗にうぐひすが「日月星」と鳴くといふところからくるのであるといふにある。この「日月星(ひつきほし)」が、無心の音声に意味づけをほどこしたものであることは、たれしにもあきらかであらうが、それならば、「今の世に鳥は法華経鳴きにけり」の背後になきこゑの(「ホー」ホケキョー)をよみとるやうに、「日月星」の背後にはなきこゑそのものをあらはすどのやうなかたちをよみとるべきか。それについて、おそらく、これだけのことは、推定できるのでなからうか。すなはち、《日月星》の「日月(ひつき)」の部分は、こんにちのビーチクと、歴史的につながる、または、語源的に、二つのかたちは対応する」と。

「日月星」は、うぐひすのあづかり知らぬ、いはば民俗語源——popular etymology——である。このやうな語源解のおこなはれた背後の心理における意図は、鳥語(?)の模倣的な再現を幼稚なものとする一種のペダントリーであらう。それがさらにすすむと、「日月星」を「三光」へまでもつてゆくわけである。だから逆にみれば、うぐひすのこゑを「日月星」と見たてるところの因襲があるといふことは、模倣的なかたちとしての「ひつき(Diurnal)」のあるふるさを推定させることになりうる。この、あるふるさの《ある》が、それならば、なにらかの資料で限定できるであらうか。

みぎに関する直接の資料は知らないが、「ひつき」になららのかたちでつながるであらうかたちなら、一例だけは、容易に指摘できる。それは、古今和歌集卷十九の俳諧歌のうちのひとつなつぎのうたにみえる「ひとくひとく」のかたちである。

題しらず

よみ人しらず

うめのはな見にこそ来つれうぐひすのひとくひとくといとひしをもる

(みぎに対する「古今集遠鏡」の口訳——)

○梅ノ花ヲ見ニキタノデコソアレ「ドウモスルコトデハナイニ、ナゼニヤラ」鶯ガ人ガクル人ガクルト鳴テ「人ノ来ルヲ」イヤガツテマア居ル)

古今集ののち、おなじやうな手法で「ひとく」を常套的にもちゐた例はあまり価値のないものとするとき、援用しうる例は貧弱であるけれども、以上から、とにかく、一応、推定しうることは、古代から中世のある時期まで、うぐひすのなきこゑは、「D-ター」のかたちでとらへられてきたものであらうといふことである。すなはち、母音の部分および、三個の音節をおほひつらぬく音調のことは別として、子音の部分は、その配列の形式と音節の数とをふくめて、かなりの確実さをもつて推定しうるものと考へる。なほ、すすんでは、かう言ふこともできる。すなはち、語を純粹に記号的な語(語彙の大部分はこれの方で占められてゐるであらうが)と模倣的な語とに一応わけてみた上で、模倣的な語の生命である・音相の面における感覚的效果としての・模倣性をふりすて、前者とおなじ平面においてあらためて後者をとりあげ

てみると、たとへば「ピーチク」という単位でもつて代表されるこの語としての形態そのものは、音相上のくひちがひ「pi: [ʃku]: [pitoku]」をつつんで、それをこえたところの一つの統一とみなすこともできる、と。いひかへれば、見方によつては「ピーチク」も「ひとく」も、おなじもの——identical——なのである。

さて、いちいちにわたくしは古今集の注釈書をひもといてみることをしてゐないけれども、おそらく古今集遠鏡このかた、べつに「ひとくひとく」の解釈についておそらく進歩はしてゐないこととおもふ。ひとは、あの歌が俳諧歌であることに心をとめてきたであらうが、あの歌の作意を十分につきとめるにはいたつてゐないやうである。しかしながら、あの歌のおもしろみまたはをかしみは、それがつまらぬだじやれであるにせよ、古代人にとつては「ひとくひとく」にあつたはず。したがつて、われわれは、「ひとくひとく」のかたちがさそふべき笑ひのなぞをとかなければ、あの歌の俳諧性にはふれられない。もとより、このことは「ひとくひとく」が「ピーチクピーチク」とか [pi: tiku, pi: tuku] とかをかすつた、いはゆるかすりの秀句であつたとか、こんにちの「ピーチク」に対応する古形は「人來」にそのまま重ねあはされる《pitoku》であつたとかいふことをただちに意味するものではない。わたくしは、——あへていへば、慎重に——子音の部分だけに於いて再建をこころみたのである。しかし、なほそれだけでも、これは、いままでの解釈——単なる口語訳——に比すれば、あの俳諧歌のよびさます感覚をかなりうかがはせてくれることに

はなるであらう。擬声語のたぐひは音韻法則どほりには変化しないことがすくなくないから、いな、えて音韻法則の適用をうけない変化をするのは、一面、擬声語そのものの外形がつねにある程度——actually にはなくても virtually には——不安定なためなのであるから、「日月星」や「ひとく」の例をてがかりとする「ピーチク」の古形の精確な再建は、むしろ、それをそむ方がむりともいへる。しかし、とにかくも、言語学におけるしきたりにしたがつて、ここにあらたに星じるしをもちゐる「ピーチク」の古形を《*pī-ter-ke》といふふうにし書きあらはすこととし、まづ、ここに、語形の面における「ピーチク」の系譜だけはこれを古代にまでさかのぼらせるみちをつけたとするならば、のころところは、用法の問題である。たとへ《*pitoke》にそのままたるかたちではなくとも「人來（ひとく）」にこじつけうるかたちで、古代のうぐひすはさへづつてゐたとするならば、つまり、古代人の耳は、うぐひすのこゑをピーチクにちかいかたちで、歴史的にいへば、こんにちのピーチクにちかいくも対応しうるかたちで、うけとつてゐたものとするならば、ここには、他面、こんにちのあつくひちがひが、すなはち、言語の慣用のうへのある変化が、はつきりみられるわけである。こんにちでは、だれも、うぐひすをピーチクとなくものとはうけとつてゐない。

それならば、外界の素朴な印象に対する感覚において、古代人と後世の人間とのあひだに生得の素質のちがひでも生じてゐるのか、そんなことは、考へられない。ただ、しかし——まづ、外界の音的印象を言語音で描写するばあひ、それが手もちの音韻の

こまに左右されるのは当然である。そして、そのやうにしてそれがことばの資格を賦与されることによつて、それは伝統のなかに組みこまれる。しかも、日本語のやうにわりにながくふるいかたが音相上の変貌をかうむらずにそのまま生きながらへてゐる言語においては、模倣的な語もまた、そのみづからにやどす印象描写の価値をそのまま保存しながら、ながくつたはつてゐる蓋然性のたかきことが考へられる。こんにちのわれわれが、うぐひすをピーチクと聞きなさないのは、いふまでもなくうぐひすのなきかたをうけとるわれわれのはの方に、いはばわれわれの耳の関心に、変化があつたのである。なぜといふに、山のおくから出てきたばかりの初音のころのうぐひすが、まだ、ホーホケキョーでないことは、じつは、こんにちのわれわれも知つてゐる。だから、富士といへば八面玲瓏、うぐひすといへばホーホケキョーといふふうにきめてしまつたのは、やや、後世のことにちがひない。こんにちでは、うぐひすをさへづる鳥のわくのなかからはづしてしまつてゐるのであるが、古代においては、うぐひすも、まづ、さへづる鳥のうちであつたのである。

いな、古代においては、うぐひすこそ、さへづる鳥の代表選手であつたものかもしれない。埴籬鈔(卷五「五十七」)には「百千鳥ハ、何ノ鳥ゾ」と設問して、

常ニ鶯ヲ云(フ)説アレドモ。只諸(々)ノ鳥ヲ指(ス)ト見(エ)タリ。万葉ニハ、百鳥トモ、千鳥トモ、百千鳥トモヨメリ。知ルベシ、鶯ニアラズト。

我カ宿ノエノミモリハム百千鳥、々々ハクレド君ハキマサヌ

百千鳥サヘヅル春ハ物毎ニ、アラタレドモ我ゾフリ行(ク)是ヲ鶯ノ様ニ聞エタレドモ、春ニ成(レ)バ万ノ鳥囀ル心ナルベシ(下略、一ナホ、句読、清濁ナドニツキテ、私意ヲクハヘタルトコロアリ)

と述べてある。《ももちどり》をもつて、うぐひすとす説が、歌学のつたへてきた伝統(的解釈)を批判したものであることは容易に旁証をもつていひうるものと考へるが、それはそれとして、なぜ、うたことは《ももちどり》がうぐひすに認同—Ident.—されたか。これも、推測するにたたくない。さへづるといへば、すなはち、まづ、うぐひすがおもひおこされたからである。ちなみに、いま、ここでは、さへづるといふ語にはなしの中心をうつすことはさけるが、こんにち、おしやべりを形容するのに、《ベチャクチャ》といふかたちをもちゐるのも、もとをただせば《さへづる》がこれまた、おしやべりをする意のことばであつたところから、じつは出てゐるにちがひない。たとへ《ベチャクチャ》の発生はわかにせよ、したがつて《ベチャクチャ》の発生したときには《さへづる》に存したおしやべりするの意の慣用は、もはやとくにすたれてしまつてゐたにせよ、日本人の心理における現象のとらへ方の系譜は、やはり、つながるとおもふのである。しらべてみないでいふのだが、文献的にベチャクチャをさかのぼらせようとすれば、おそらくうまくいつて、それは、このやうな語の性質上、江戸末期の戯作者たちの作品——人情本やこつけい本——ぐらゐまでがせいぜいのところであらう。しかし、いまは、その点は、どうであつても、さして、さしつかへな

い。どのみ、《ペチャクチャ》も、語源的には《P—t—k—》に、いな、精確にいへば《P—t—k—》のかたちに対応するものと考へられる、(比較、「ピーチクとさへづる」に対して「ペチャクチャしやべる」。韻律のことばでいへば、《ペチャクチャ》は《P—t—k—》を二拍のくりかへしのかたち(型)としてみれば、 $\backslash \times \backslash \times \parallel$ trochee)に、あらたにしたてたものなのである。さて、ここに、わたくしは《ペチャクチャ》にまでふてをおよぼした。けだし、古代には、うぐひす(のさへづり)が、こんにちわれわれが想像するよりも、もつと卑俗な感覚でうけとられることさへふつうであつたかもしれないからなのである。

さて——

後拾遺和歌集 第十九——いつかまたこちくなるべきうぐひ

すのさへづりそめし夜はの笛たけ(作者、相模)

「うぐひすのさへづり」それは、春鶯囀をおもひおこさせる。平安貴族には、すぐそのメロディーさへ心にうかんだでもあらう。

しかし、それは、まだ、それだけでは、この歌を理解するための背景の知識であるにすぎない。この歌の個性は、そのやうな知識の前景にくりひろげられたもつとはかないことばのあやである。

いま「うぐひすのさへづりそめし……」から「……さへづりそめし夜はの笛たけ」へと屈折してゆくすがたをこのやうな歌の技巧としてとらへてみるならば、それはつぎのやうにいひうるであらうか。すなはち——、さへづりそめしうぐひすのこゑ——じつは、それに対応することば——であつてこそ、かへつて日本語としては、笛の音色——じつはそれに対応することば——にたくへ

られるものとみうるならば、この歌のこころにふれうるために直接にわれわれが連想のあみにすぐひあげてみるべきは、みがきのかかつた老鶯のトレモロではなく、いとけない初音のおぼつかなさの方であるであらう。そして「さへづりそめし」とあるそのおもひでの夜の幻想のなかを初音のうぐひすがゆるやかにfade outしてゆくにつれ、ふえ竹がゆるやかにfade inしてくるその二重うつしの焦点は適度にあまく「p」にしばられるのである。

ここまで来れば、わたくしの、和歌の幻想にたましひをゆだねることを目的としてはゐないわたくしの、その考へてゐるところは、もはやはつきりと一点にしばられてくる。それは、とぼしい材料からみちびきださうとする散文的な一つの推論、とりのさへづりをうつすかたちは、古代からp……だつたのではなからうかといふことである。つまり、わたくしの関心の焦点は、かかつて「ひとく」の第一音節、さらにしほつては、その子音の部分にある。もとより、写声やまたは音象徴のごときに「p」がもちゐられたことがあつたからとて、この事実をもつてただちに、phonemeとしての平安時代のハ行子音が、その実質において、(両唇)破裂を特徴としたものであつたなどといふことにはならぬ。しかしながら、古代からずつと近代までたえることなく、民衆の口において素朴に「p」の音が一定の表現ではつねにつかはれてきたこと、このことだけは、ここにとりあげた些細な例からも、ほとんどまちがひなく、うかがひうるであらう。

つ け た り

文章としては、みぎで切つておいた方がすつきりとしてゐるが、原稿を印刷にまはすまへに、たまたま拙宅をおとづれたわかい友人に以上をしめして、以下に述べるところをばなししたら、それも書いておいた方が参考になつてよいとすすめてくれたので、あるいは蛇足かもしれないけれど、いささかの付記をくはへる。どうせ足をつけることになるのならと、いつそ、二本あしにする。(一)本文にしるしたところの推定をみとめ、これをふまへてつぎのうたをみるならば、そこにあらはれる「うぐひす」の「ひす」も、《Pō-ŋ-ŋ》のさへづりをかすつたものとみうる。

心から花のしづくにそほちつづく、ひす、(袋タ干ズ)とのみ鳥のなくらむ(古今集、物名、うぐひす)

こんにちのサンスセソは、摩擦音の「p」「t」ではじまるが、古代はそこが破擦音であつたと推定されるから、みぎの「うぐひす」の「ひす」に「*pitiŋ」のかたちを擬することができる。「ひす」の「す」が破擦音であつたとすれば、その聴覚的印象を利用して、かすりの効果をねらつたといふことも十分に考へうところである。なまごゑをかすつたうへで「干す」の意味にかけたとみる方が、歌の解釈としても適當ではないかとおもはれる。いはゆるサ行音が古代には破擦音であつたとする考へに疑問をいだくひともあるが、ここには、その問題をとりあげることはできないものの、わたくしとしては、やはり、破擦音であつたと推定することがただしと判断する。いはゆるサ行音といはゆるタ行音との交渉については、別に述べたい。

(二)中世の「ひつきほし」(日月星)は、《Pō-ŋ-ŋ》のかたち

から派生せしめられて、これ全体で、つまり、このやうな五音節のかたちで、さらにいへば、おそらくは「*pitukipō(t)si」が一個の統一ある単位のかたちで、こんにちのホーホケキョーにはばあたる価値をかつては負はされてゐたものかとおもふ。わたくしは、「ひつきほし」の「ひつき」の部分だけが写声だとのみ考へてゐるわけではないのである。しかし、この点を追求してゆくこと、ひいては、ホーホケキョーは、のちにふるいヒツキホシのかたちにとつてかはつたものではなからうかとの見とほし、それらについては、いまだ傍証となる資料がえられない。

しかしながら、また、ヒツキホシがホーホケキョーの前身であつたかもしれないといふ予想までもとりさげることはない。たとへば、西鶴の諸艶大鑑(巻二)の「百物語に恨が出づる」の書きだしに「鶯の子に三光を付ると。か(な)らず其声を囀る(「一字衍」ぞかし)とある、この「三光をつくる」とは、くだいていへば、ホーホケキョーとなくやうにしこむことと解される。このばあひ「三光」といふことばの背景に「pi: tukipo(t)si」といふかたちでのホーホケキョー(と同価値のなまごゑ)を連想してよいならば「三光をつくる」といふ表現が単に抽象的なものにとどまらずに、もつと生きてくることだけは、たしかである。たとへ、西鶴がそこまで連想をはたらかしながらみぎに引用した個所を書いたかどうかはわからないまでも、また、当時の読者が「三光」といふ抽象的なことばから、すぐいきいきとうぐひすのなまごゑを、みんな、おもひうかべてあの個所をよんだかどうかは、もとよりわからないけれども。